

パニウム - ナンバーワン

第十一章

Jeff Pippenger

2025-02-25

しばらくの間、私たちはダニエル書11章40節の隠された歴史に注目してきましたが、ここ数週間、主は私たちの思いを27節へと向けておられます。

この二人の王の心は悪事を企てることに向かい、同じ食卓を囲んで偽りを語るが、うまくはいかない。終わりはなお、定められた時に至るからである。ダニエル書 11:27

当初、いつ、どこで、誰がその卓に座って互いに偽りを語り合っていたのかといった詳細については確信が持てませんでした。こうした問いは現在、精査中です。ここ数回の安息日に、これらの箇所に取り組む中でいくつかつまずきもありました。けれども、摂理的な導きであると信じつつ、カイサリア・フィリピによって象徴される13-15節に示された同盟関係が解き明かされ始めました。なお洗練を要する要素は残っているものの、主がこれらの節から御手を取り去り、その意味を明らかにしてくださったと信じています。

この理解は、先の安息日のZoom集会の直後に一気に結晶化した。その1週間前、私は10節から15節における歴史の複雑な絡み合いに心を打たれていた。私は自分の考えの概要を数人にテキストメッセージで送り、金曜の夕べにそれを分かち合いたいと願い出た。そこにはきわめて重要な何かがあると確信し、その箇所に含まれる諸問題を整理しようとしていたのだ。実際にあった。だが、それは当初私が提起したものではなかった。この箇所と格闘するなかでこの1週間半のあいだにつまずきを重ねたにもかかわらず、私は馴染み深い摂理を認めた。主が特別で極めて重要な真理の封印を解いておられたのだ。人間的要素が完全に暴かれて脇に退けられると、ユダ族の獅子によって開かれたその真理は、私が把握していた以上にいっそう深遠であることが明らかになる。

第5節から第9節

南の王としてのプーチンはプトレマイオスを映し出しており、ウクライナ戦争で勝利して11節を成就するだろう。歴史的には、ラフィアの戦いにおけるプトレマイオス4世フィロパトルの勝利がこの節を成就し、プーチンの差し迫った成功を予表した。5~9節は、教皇権の1260年にわたる支配（538~1798年）を綿密に予表する歴史を描き出している。これらの詳細は過去に繰り返し検討されてきたので、ここでは5~9節で成就し、538年から1798年の期間にも響き合う一つの予言的な道しるべを取り上げたい。

この時期は、南のプトレマイオス王国と北のセレウコス王国との間の条約から始まり、その条約は南の王が娘を北の王に嫁がせることで締結された。この結び付きによって七年にわたる期間が始まり、その終わりには南の王が北方へ侵攻して北の王を捕虜としてエジプトへ連行し、その捕虜となった王は後に落馬して亡くなった。

破られた条約

侵攻は、破られた条約に端を発した。七年の期間が始まると、北の王は最初の妻を退け、条約を確かなものにするために南の王女と結婚した。やがて彼は南の妻を退け、元の王妃を復位させた。これを受けて、最初の王妃は南の王妃とその側近たちを処刑し、エジプトにいる南の王妃の一族を激怒させた。

預言的な洞察によれば、七年は三年半ずつの二つの期間として見ることができる。これは、キリストが契約を確認した一週を、十字架の前後の三年半が合わせて表していることに示されている。三年半はまた、紀元前723年から1798年に至るまでイスラエル北王国に下された七倍の呪いの中にも認められる。その七倍は、538年を中間点として、1260年ずつの二つの期間に分けられている。七が三年半ずつの二つの期間に分けられるというこれらの例は、偶然ではなく、意図的である。

キリストが契約を確証したその「一週」の分割において、十字架は中心を表し、これによって、最初の三年半はキリストご自身が直接メッセージを伝え、その後の同じ期間は弟子たちがそのメッセージを伝えたことが示される。北王国に対する「七つの時」においては、538年が歴史を二分し、前半は異教が聖所と軍勢を踏みにじた時代、後半は同じ期間だけ教皇制が聖所と軍勢を踏みにじた時代となる。預言の象徴において「七」は三年半で表され、その三年半はさらに、42か月、3日半または3年半、1260、2520、そして「一時と二時と半時」によって表される。文脈において、これらの数値はすべて相互に置き換え可能である。

エジプトを支配したプトレマイオス1世（アレクサンドロス大王の将軍）の子孫が統治するプトレマイオス朝と、シリアを含む中東の大部分を支配したセレウコス1世（アレクサンドロスの別の将軍）の子孫が統治するセレウコス朝との間で結ばれた条約は、紀元前253年に第二次シリア戦争を終結させた。戦争はその7年前の紀元前260年に始まっていた。条約の批准から7年後の紀元前246年に、その条約は破られた。合計14年で、7年ずつの二つの期間に分けられる。前半は戦争、後半は平和である。この14年は第二次シリア戦争で始まり、第三次シリア戦争で終わる。この種の歴史の対称性は、この歴史が第11章の5節から9節に記されていることに気づくと、いっそう強調される。条約とその破棄が、これらの節と、その節を成就した歴史の焦点となっている。

これは538年から1798年にかけての教皇の支配と一致する。その時代の終わり近くに、ナポレオン・ボナパルトはバチカンと条約を締結した。1797年のトレンティーノ条約に対するバチカンの違反を理由に、ナポレオンは1798年にベルティエ将軍を派遣して教皇を拘束させた。教皇は1799年にフランスで死去した。この1260年の期間は31～39節に詳述されている。

5～9節の歴史は31～39節のそれと並行しており、ダニエル11章の中に二つの証言を提示している。両者は同一の預言的な道標を共有しており、南の王と北の王の力学を明らかにしている。各期間は三年半で象徴され、結末として南の王が優勢となり、北の王を捕らえて南の地へ連行し、そこで北の王たち二人が死ぬ。いずれの場合も、本文の述べる通り、南の王は戦利品を携えて帰還する：

また、彼は彼らの神々と首長たち、さらに銀や金の貴重な器をも捕虜としてエジプトへ運び去る。そして、彼は北の王よりも長く生きる。

プトレマイオスにとって、これは北の王が以前に略奪した財宝だった。ナポレオンにとっては、それは略奪されフランスへ持ち去られたバチカンの富だった。この二つの証言は、北の王の死が落馬によって象徴されていることを示している。黙示録17章では、獣に乗る女はカトリック教会を象徴している：

それで、彼は私を霊において荒野へ連れて行った。そして私は、冒涇の名で満ち、七つの頭と十本の角を持つ緋色の獣の上に座っている女を見た。黙示録 17:3

彼女が乗っている獣は国際連合である。黙示録17章は、1798年の致命的な傷の後に彼女が権力を回復することを描写している。第八の王国として、彼女は支配を再開し、そのことは獣に乗ることで象徴されている：

そして、あなたが見た女は、地の王たちの上に君臨している大いなる都である。ヨハネの黙示録 17:18.

1798年の致命的な傷は、北の王が馬から落ちて死ぬことで、5-9節に予表されていた。ダニエル書11章のこの二つの区分は、41-45節と並行している。41節で示されている米国の「日曜法」は、教皇制が獣にまたがった最後の騎行を開始し—その期間はこの二つの区分に反映されている。エレン・ホワイトが、ダニエル書11章で成就した「多くの歴史」が「繰り返される」と述べているとき、5-9節と31-39節は41-45節と一致する。

第四十節のみ

31節から45節までの中で、三日半の預言の期間の外にあるのは40節だけである。それは、ダニエル書の45節のうち最後の3分の1における独自の歴史を示している。16節では、異教の帝政ローマの歴史が、ポンペイウス、ユリウス・カエサル、アウグストゥス・カエサル、ティベリウス・カエサルという四人の支配者を通して展開している。紀元前31年のアクティウムの海戦におけるアウグストゥスの勝利は、帝政ローマの360年の支配の始まりとなり、24節の「時」を成就した：

彼は、その州の最も豊かな所にさえ平穩に入り、彼の父祖もその父祖も行わなかったことを行い、彼らの間に獲物と戦利品と富を散らし、さらに、しばらくの間、堅固な要塞に対して自らの計略をめぐらすであろう。ダニエル書 11:24.

アクティウムの戦いの後、ローマは紀元前30年にエジプトを属州とした。360年後の330年、コンスタンティヌスは帝国の首都をローマからコンスタンティノープルへ移した。この「時」は、預言的には、教皇支配の1260年および5~9節の7年と符合する。

16節から30節までは、異教のローマ帝国が支配し、その中にはマカバイ家のローマとの同盟とキリストの系譜が含まれる。しかし、16~30節は31~39節および41~45節と対応している。したがって、ダニエル書11章の最後の30節には一貫した預言の筋道が見いだされる。ただし40節のみ例外で、そこでは「終わりの時」が1798年と1989年に特定されている。

2節と3節にいくつかの小さな例外があり——そこでは、八人の大統領のうち最後の者が国際連合の十人の王たちを支配する段階へと移行する——最初の二節は40節と一致し、日曜法と、第六の王国から第七・第八の王国への転換を表している。3節と4節は45節およ

びダニエル12章1節と一致し、ギリシア王国の興亡を描き、41節からダニエル12章1節に至るまでの、教皇制の成立と没落に並行する。女も彼女が乗る獣も、助ける者もなく終わりを迎え、40節の歴史の外側でダニエル11章の始まりと終わりを枠づけている。アレクサンドロス大王は国際連合を象徴し、ツロの娼婦（41節以降の北の王）と姦淫するが、彼女は獣であり、同時に竜でもある。

第九節と第十節

5～9節は1798年の終わりの時で結び、10節は1989年を示す。したがって、9節と10節の間、すなわち1798年から1989年までの期間は、40節の明らかにされた部分を表し、その隠された歴史を開始する。明確にするために言えば、ダニエル書11章のほぼすべての節は538年から1798年にかけての教皇権の支配を反映している。40節は1798年からアメリカ合衆国における日曜法に至るまでを扱う。6～9節は教皇時代を象徴し、10節は1989年のソ連崩壊を予示する。ゆえに、11～15節は1989年から日曜法までの期間にわたり、これは16節、31節、41節に示されている。

40節は二つの部分に分かれている。前者は1798年から1989年までで、「終わりの時」に始まり、また「終わりの時」で終わる。後半は、前半が終わる1989年から始まる。1節と2節は1989年に始まる一連の大統領を示しており、40節の後半と一致する。11節は2014年のウクライナ戦争の勃発を示し、12節は勝利した南の王が自らに招く結果を浮き彫りにする。13節は成就が近づいているが、ここで留意すべきは、11節が40節の後半（1989年以後）に含まれつつも、なお日曜法（41節）以前であるという点である。

13～15節は紀元前200年のパニウムの戦いを指し示しており、その戦いに関連して、異教ローマが人間の事柄に影響力を及ぼし始めた年である。これは16節におけるポンペイウスのエルサレム入城のはるか以前に起こった出来事であり、41節を米国における日曜法と特定する歴史的証拠となる。

ダニエル書11章におけるすべての預言の各ラインとその歴史的成就是、第40節の歴史（1798年から日曜法まで）か、あるいは第41節からダニエル書12章1節までのいずれかに属する。全45節のうち、1節、2節、7～15節、および40節の計12節が、行に行を重ねて見ると第40節のタイムラインに適用される。40節は1989年で二つの区分に分かれる。1節、2節、そして10～15節はその後半と一致する。1節と2節は地の獣の歴史における大統領の系譜をたどり、10～15節は1989年から日曜法に至るまで、北の王（教皇権）が画策する三つの代理戦争を描いている。これら三つの代理戦争は、40節で「戦車、船、騎兵」として示されているアメリカ合衆国から始まる。

続きは次回の記事でお届けします。